活動ピックアップ！

長岡 地域 Nagaoka

見て、触れて、野菜に親しんでほしい！

PETA VEGE

長岡市内外のイベントに出店し、廃棄野菜を使った野菜スタンプのワークショップを開催。参加した子どもたちに、野菜の手触りや形、匂いなどを通して、多様な種類の地元野菜や、食卓に上らずに捨てられてしまう野菜のことなどを身近に感じてもらいたいと考えています。最近は、小学校でワークショップだけではなく、農業やSDGsについてのお話をさせていただく機会もできました。今後は農業体験の実施などにも挑戦してみたいです。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

8 働きがいも経済成長も

働きがいのある職場を地域に増やす！

グローカルマーケティング株式会社

地域の中小企業の課題解決・売上アップを支援する会社です。近年、人手不足と価値観の変化により採用・人材育成の相談が増えました。当社も社内改革を行い、制度の整備だけではなく、社員の飲み会代、クラブ活動費を補助するなど社内のコミュニケーションにプラスとなるアイデアを多数採用。風通しのいい職場となり定着率が大幅にアップし、志願者も増えました。そのノウハウを活かした採用・人材支援で、働きがいのある職場を増やしていきます。

市民活動

虎の巻

研究テーマ

プレスリリースの書き方 ～5つの「S」を意識しよう！～

より詳しく知りたい方はこちら！

プレスリリースとはメディアや記者さんへのラブレターのようなもの！告知をするにあたり、時間やお金に制約のある市民団体としてはぜひ活用したい手段のひとつです。知ってもらい、興味をもってもらい、そして好きになってもらえる書き方を、5つのポイントにまとめてご紹介します！

1 Surprise（驚き・革新）

「県内初！」「ついに！」など今まで当たり前ではなかったもの、想像しえなかったことがタイトルに入っていると興味が湧きやすいです。

2 Season（季節・時流）

季節にちなんだイベントや年中行事に合わせた企画、その時々の流行を盛り込んだ内容であると自然に興味をもちやすくなります。

3 Story（背景にある物語）

この活動にはどんなねらいがあるのか、どんな課題があるのかなど他の活動と差別化できる内容が入っていると目に留まりやすいです。

4 Self（自分に関係がある）

メディアや記者さんにはそれぞれ得意な分野があります。興味をもってもらえそうな媒体とのつながりを自分でつくることも大切です。

5 Summary（概要）

イベントの日時や場所、連絡先、参加費、定員、申し込み方法などを簡潔にまとめた欄を作りましょう。

＼ 教えてくれた人！ ／

プレスリリースは簡潔に書こう！

FMながおかパーソナリティー 山田光枝さん

放送10周年を迎えたながおか市民協働センターのラジオ番組「つながるラジオ」を担当。

センターからのお知らせ

越後長岡まちの駅 シールラリーの旅2023

2023年7月29日（土）～9月3日（日）

人や情報が集まる場所「まちの駅」では、まちの駅をめぐってご当地キャラシールを集めると、抽選で素敵な景品が当たる「シールラリーの旅2023」を開催します！

詳細は、QRよりご覧ください▶

コライトHP

発行

ながおか市民協働センター

〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F
Tel . 0258-39-2020
Mail . contact@nagaokakyodo.net

知る、つながる 好きになる らこって

つながる ラジオ

市民活動のポータルサイト コライト

配布場所　長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。

らこって

Racotte

知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌

2023
7
vol. 127

互いの長所を持ち寄り、補い合う 協働事業

特集
ながおか農challeプロジェクト実行委員会
実行委員長 **大島 健**さん
長岡市農林水産部農水産政策課
大竹 聡史さん
ウィメンズヘルスlab
平澤 幸恵さん

NAGAOKA PLAYERS
小林 華子さん

活動ピックアップ
PETA VEGE

長岡みんなのSDGs
グローカルマーケティング株式会社

ながおか市民協働センター

互いの長所を持ち寄り、補い合う協働事業

新型コロナウイルスが5類感染症に移行され、イベントの復活や人数制限が解除されるなど、徐々にコロナウイルス禍前に戻りつつありますね。ここ数年間、やりたいことを思うようにできなかった分、これから始めたいという方も多いのではないでしょうか。物事を始めようと考えたとき、何をやるにも誰かと協力して行う方が負担も軽くなり、様々なアイデアを生み出すことができますよね。誰かと協力して行うメリットは、団体においても同じ。では、他者や他団体と協力して事業を進めていくために、どんなポイントを意識すればいいのでしょうか。

双方の強みを活かす、行政と市民団体の協働事業

協働事業の例として、行政と市民団体の協働が挙げられます。「全体の奉仕者」であるが故に特定の分野だけに注力できない行政と、柔軟な発想を持つ市民団体。双方が持つ長所でお互いの短所を補い合うことができます。団体やイベントの立ち上げ期は、社会からの認知度や信頼度が低いこともありますが、行政と協働することで広報力・信頼力アップにつながります。また、予算規模が大きくなることで、活動の幅を広げることも。一方、行政にとっては、手の届かない細やかなニーズや、地域課題にリーチすることができます。

キャッチーなイベントで農業振興を目指す

2023年で6回目の開催を迎える「世界えだまめ早食い選手権」。イベント名を聞いたことがあるという方も多いのではないでしょうか。第4回大会では、1日で来場者12,000人を越え、市内でも大きなイベントの一つとして数えられています。同イベントの実行委員会を立ち上げたのは、長岡市で生産される枝豆の魅力を広め、消費を拡大させたいという想いを持った若手農家の皆さんでした。

イベント当日は早食い選手権の他、枝豆を使ったグルメが楽しめるマルシェ「エダマメフェスタ」も同時開催。会場全体で消費する枝豆の量は700kg以上。来場者も市内にとどまらず、

ながおか農challeプロジェクト実行委員会
実行委員長大島健さん（左）と農水産政策課大竹聡史さん（右）

県外、国外から幅広い世代が訪れ、長岡の枝豆を楽しんでいます。多くの人を惹きつける魅力は、「枝豆の早食い」というキャッチーな企画にあります。マスコットキャラクターやレフリーなど、大会を盛り上げる仕掛けも多く、来場者が楽しみながら枝豆を消費し、その結果が長岡の農業を盛り上げ、地域活性化につながっています。

イベントを主催する「ながおか農challeプロジェクト実行委員会」は、2016年の初開催から、長岡市農水産政策課を含む様々な組織と協働で開催。2017年から農水産政策課で同イベントを担当している大竹聡史さんは、「団体として目指している長岡産野菜の魅力発信や消費拡大が、当課としても目指している部分と合致していた。市民団体と協働することで、行政にはない柔軟な発想のイベントができ、幅広い世代や地域に認知されている」と話します。

持続可能な事業を続けるために

「大きなイベントになればなるほど、市民団体の力でできる限界を感じていた」と話すのは、実行委員長の大島健さん。イベントの規模に比べて、実行委員会メンバーは14人と少人数のため、イベントを開催するには、様々な団体に役割を担ってもらう必要がありました。例えば当日選手権などで消費する約1,000人分の枝豆は、JAえちご中越が確保。選手権で使用する枝豆の品種が統一できるよう調整を行っているほか、当日は運営スタッフとしても参加しています。また、手続きや調整が必要なマルシェは農水産政策課を中心としたメンバーが担当。それにより、枝豆をはじめとした長岡産の食材を使用することをルールに設けるなど、より長岡にこだわったマルシェを開催できると大竹さんは話します。関わる組織が持つ長所を活かし、必要な部分を補い合うために、行政、JAの職員も実行委員メンバーとして所属し、イベントの方向性や役割分担を話し合いながら進めてきました。それだけ多様な組織が関わる理由の一つは、イベントを通して長岡産野菜のおいしさや魅力を広めていることにあります。これまで全国テレビ番組や全国誌などに数多く取材されてきました。イベントが全国から注目されていることで、「長岡市」の認知度アップに貢献しています。

専門分野を担い、活動を進める

行政が行う施策の企画・実施を市民団体が担うことも、協働事業の一つ。「ウィメンズヘルスlab」は、乳がんをはじめとする、女性特有の病気の予防や早期発見ができるよう出張・出前講座などの活動を行っています。代表の平澤幸恵さんは「団体として活動を始めるとき、自分たちだけでは活動を広めるのに限界があると感じ、他団体に協力してもらおうと思った」と話します。まずは、助産師として働く中でつながりのあった行政や母子保健推進員協議会に、団体の想いを伝えるとともに、各団体向けの事業提案を行いました。同時に自分たちで少しずつ積み重ねてきたPR活動と実績や、活動メンバーの多くが助産師であるという専門性の高さから、行政や企業から育児相談、ママ・パパ向け講座などの依頼が舞い込むようになったそう。他団体が協働することで、今までつながりのなかった市民に情報を届けられるようになりました。

講座を引き受けるポイントとして、依頼者の意向に沿った内容を入れながら、団体として伝

全国ネットのTV番組にも多く取材され、参加者も県内外から応募があり、倍率は何と約4倍。

えたい乳がんや病気の啓発を組み合わせて講座の提案をしていると平澤さんは話します。団体として守りたいこと、必ず伝えたい部分の芯は変えずに、相手が必要とする要素を足していくことで、双方が行いたい事業を実施できています。

団体ができること、足りないことを理解する

今回取材した2つの団体は、それぞれ目的が一致している組織と協働事業を行っていました。そして、その協働によって生まれた成果があることで、事業が継続していきます。行政に限らず、他団体と協働していくためには、団体の長所と短所を把握しておくことが大切。長所が明確だと、自分たちにしかできない事業提案ができ、短所を知っていればそこをカバーしてくれる協力者を探すことができます。様々な長所を持ち寄り、お互いの足りない部分を補うことで、より広く、長く続けられる活動になるのではないでしょうか。

コミュニティセンターで開催した「女性のがん講座」。講義の後は模型を使って、自己検診で乳がんのしこりを確認できる方法を伝えています。

第6回 世界えだまめ早食い選手権

日時　2023年7月16日(日) 10:00〜17:00
競技会場　アオーレ長岡

日本随一の枝豆消費量!
新潟ながおかの枝豆が食べられます!!
皿に盛られた枝豆(個人:300g / 団体:1,000g)を100秒間で何グラム食べたかを競う国際競技大会です。

マタニティサロン BabySpoon

開催日　毎月第2土・日のいずれかの半日
対象　安定期に入ったプレママさん・パパさん・祖父母のみなさんも
会場　申込時に公式LINEよりお知らせします
参加費　2,000円〜(お茶・お菓子付き)(最少催行人数2名)
講師　ウィメンズヘルスlabメンバー

NAGAOKA PLAYERS

ウワサのあの人にインタビュー!

小林 華子 さん（51歳）

ホテル管理マネージャー及び農業体験アクティビティ担当／てらどまり若者会議〜波音(はね)〜

1971年京都府生まれ。造園設計やフラワーデザインなど多岐にわたる仕事を経験。結婚を機に寺泊へ移住。家の農業や造園業を手伝う傍ら市民活動に関わる。

大切な出会いから得た「楽しい」でつながる可能性

結婚を機に京都から寺泊にやって来た小林華子さん。第一印象は「何もない・田んぼばかり」。「地域のことはよくわからないし、外に出て行こうにも、知り合いがいない状況は頭がおかしくなりそうでした」と言います。出産後、子育て支援センターに出向いたことがきっかけで子育てサークルや地域のボランティア、「てらどまり若者会議〜波音(はね)〜」の一員として市民活動に携わるようになりました。

家庭の外でのつながりは救いであり、やりがいだったという小林さん。はじめは人の役に立ちたい一心で活動を行ってきましたが、40代に入った頃、自分のしてきたことが地域のためになっている実感がないことや、地域で様々な役を担いすぎていたことからキャパシティーを超えてしまい、大不調の時期がやってきました。このときは人に会うことも辛く、しかし家にいるのも息が詰まるので、夫の実家の畑仕事や山菜取りに黙々と向き合っていたと言います。

長い葛藤の中、40代後半に大不調から抜け出す転機となる、人生の師匠との出会いがありました。その方は、以前寺泊海岸沿いにあったカフェバー「ローズマリーガーデン」店主の原田美喜子さん。

寺泊コミュニティセンターと一緒に企画し実現した、廃材再生師・加治聖哉さんの講演会後の集合写真。

「何をすれば皆が寺泊を楽しんでくれるのか」という悩みを打ち明けたときに、原田さんからかけられたのは「自分が楽しんでいれば人は集まってくる」という言葉でした。それから気持ちが楽になり、地域課題に対応した事業を企画・運営する「地域学びコーディネーター講座」を受講。コミュニティセンターの主事さんと一緒に自分が楽しいと思える企画を考え、かたちにしていくことで地域のためになっている手応えも感じられるようになりました。

今後は、一番大切にしている「人と場をつなぐ」活動をしていくために、地域の資源を活用した、様々な人が集う場所をつくりたいそう。ホテルの仕事もその一つだと言います。老若男女問わず地域の方はもちろん、県外の方にも寺泊のよさを知ってもらい、楽しんでほしいという想いを込めて今日も活動しています。

てらどまり若者会議〜波音〜の寺泊産日本酒プロジェクトで、稲刈り作業をしている様子。

活動の根っこ

ないものを楽しくつくるでつながる!!
小林華子